

# River 「農の暮らし」(34) “釣りときどき〇〇”の生活にあこがれて



今回は、土佐の豊かな川を取り戻そうと活動されている松浦秀俊さんに、ご自身の取り組みについて投稿していただきました。

## 多くの生き物でにぎわう“土佐の川”復活をめざす

松浦 秀俊

### きらめいていた少年時代の四万十川

私は四国の高知で生まれ、育ちました。高知は海国と思われがちですが、実は森林率 84%と日本一の山国でもあります。加えて気候も温暖で、夏場を中心に降水量も多く、豊かな川に恵まれています。小学校のころは、仁淀川や四万十川のほとりで川を遊び場にして育ちました。川面を一面に黒く染めるアユの群れ、石ころの数より多いうなぎや川エビ。そんな中で育った私は、川遊びや釣りが大好きとなり、ひとりで高知で魚に関係の深い仕事に携わるようになりました。



仁淀川支流でのフナ釣り(63 年頃の筆者)

### 高知の川の再生へ向けて

あれほど豊かだった高知の川も山の荒廃や河川改修、砂防ダムの建設、川砂利採取等により年々悪化の一途をたどり、アユやうなぎなど川の生き物も激減してきました。ほんの 30 年ほど前には、四万十川だけで全国の天然アユ漁獲高の 10%を占め、“アユ王国土佐”と言われていましたが、今や見る影もありません。そんな状況に危機感を抱いた私たちは、

十数年前から「高知県友釣り連盟」、「仁淀川の緑と清流を再生する会」、「物部川 21 世紀の森と水の会」などの NPO を立ち上げ、釣り人や流域の人たちと様々な活動を行ってきました。

全国からアユを集めて、「アユの食べくらべ」から河川環境を考える「利きアユ会」、流域みんなで川の恵みに感謝する「物部川祭り」などを開催したり、子供たちに川に親しんでもらう場として“川の駅”を開設してきました。



川の駅  
(右端は筆者)



物部川祭り



利きアユ会

### 『地球村』と出会って

98 年に友人の勧めで高木先生の講演会を聴き、すぐに地球村に入会しました。近

隣の講演会に欠かさず参加するうちに、私が仲間たちと何とかしたいと思っている河川環境の問題も地球環境の問題も、本質的には同じだということに気がつきました。また、WSに参加して、「周りを変えるためには、まず自分が変わることが大切である」ことも学びました。そして、今までの色々な活動の中で、うまく伝わらない原因も、関心のない人からは、私自身が“アユ教”の信者、もしくは教祖と見られていたのだと分かってきました。

2006年には、仁淀川リバーキーパーの会を設立し、漁協の方々と意識の高い釣り人で協働して、川やアユ資源の再生に取り組むようになりました。世話人の私は非対立を心がけ、対立しがちな漁協と釣り人のお互いの思いをぶつけあいながらも、信頼関係を築けるように腐心してきました。

アユの遡上調査や解禁前のモニタリング調査、放流や産卵場の造成など多い時には50人くらいが、関心を持って集まってくれます。漁協のHPや釣り人のブログを通じて、興味を持つ若い釣り人の参加も増えており、手応えを感じています。



釣り人と漁協が協力してアユ産卵場造成

### 漁師さんの知恵に学ぶ

私の尊敬する四万十川の川漁師さんは、よくこんなことを言っていました。「川の水自体が生きている。そして水辺の微生物の働きで、水を浄化したり、水温を調節した

りしている。その大切な水辺を壊したり、コンクリートで固めたりすれば水が死んでしまい、やがて最後には川も死んでしまう」。私たちはこうした漁師さんの言葉に耳を傾けることなく、水辺を壊し続けてきました。四万十川の恵みの象徴である天然スジアオノリも、最盛期の50tの水揚げが、今では1t足らなくなってしまいました。最後の清流と言われた四万十川も、いままさに“清流の最後”となりつつあります。

高知県では、海の漁師さんは30年間で半数となり、川の漁師さんはほとんどいません。漁業の衰退は、長年培われた漁師さんたちの海や川とうまく付き合っていく知恵を失うことであり、海や川に張りめぐらされたセンサーがなくなることだと感じています。

### 川漁師をめざして

『地球村』に出会い、たくさんの方が、本気で農的生活を目指し取り組んでいる姿に触発され、小さいころからの夢だった“釣りときどき〇〇”といった川漁師の生活を四万十川のほとりで、始めたいと思っています。そして、自らが流域で暮らし、センサーの感度も上げて、私の役割をはたすことによって、多くの生き物でにぎわう本物の“土佐の川”を孫たちの世代に何とかバトンタッチできることを願っています。

